

書評：中谷義和『国家論序説』（御茶の水書房、2017年）¹⁾Review: Y. Nakatani, *A Preface to the State Theory*

加藤 雅俊*

政治学（を含む社会科学）において、「国家」という概念ほど重要であるにもかかわらず、十分に検討されてこなかったものはないかもしれない。例えば、現代政治学においては、「福祉国家」、「民主的国家」、「自由主義国家」、「規制国家」、「競争国家」をはじめ、現代社会における重要な政治システムである国家の特徴について分析・考察する研究は数多く存在するが、「国家」それ自身を概念的・理論的に検討するものはそれほど多くない（例外として、Jessop 2016, Smith 2009, Smith 2000。現代国家に関する研究動向の整理として、佐藤 2014, Campbell and Hall 2015, Dryzek and Dunleavy 2009, Lachmann 2010, Pierson 2011）。むしろ、政治秩序を分析する上では「国家」の概念は不要として、「政府」や「ガバナンス」などの諸概念を重視する場合もある（例えば、アメリカ政治学における経験的研究など）。このような学問状況に対して、「国家」概念の重要性を説き、政治学における今後の理論発展の基礎を提供するのが、中谷義和²⁾『国家論序説』（以下では、本書）である。本書は、アメリカ政治（思想）史研究、政治学史研究、国家論、グローバル化論などの諸領域で数多くの顕著な業績を残してきた著者の集大成ともいえる研究であり、社会経済が安定化するためには政治を媒介とした関係化が不可欠であるとする「関係論的アプローチ」に依拠し、国家論のエッセンスや重要概念などを紹介するものである。以下では、各章の概要を簡単に紹介し

* 立命館大学産業社会学部准教授

た上で、本書の意義と残された課題について検討する。

序章の「国家論の基礎概念」では、関係論的国家論を展開するための基礎的な諸概念が提示され、概念間の関係性が検討される。例えば、社会構成体と権力機構の複合的総体の政治的表現である「国家存在」、国家の歴史的形成に由来し、複合的総体である国家の関係論的表現を指す「国家性」といった概念が提示される。そして、国家概念には「二重性」があるとして、権力組織を指す場合と、社会経済諸関係の総体を指す場合があることが示される。また国家に関連する概念として、所与の社会を管理するための組織と機能を指す「ガヴァメント」、統治に占める多次元的関与主体のネットワークを指す「ガヴァナンス」、領域の対外的自律性と対内的統一性を示唆し、国家の至高性を指す「主権」などが示される。そして、国家が安定化するために必要となる諸要素として、従属的諸階級や諸勢力の同意を調達する知的道徳的指導力を指す「ヘゲモニー」、社会的諸関係や国際関係の変化に対応しようとする際の国家的規模の構想や計画である「国家企図」、国家企図が政策過程を経て現れるものである「国家政策」などの概念が紹介される。そして、近代国家の特徴を捉えるために、国家という関係論的表象の人格的実在が国民であり、両者が一体的に表象されたものである「国民的国家」、国家における心理的紐帯である「ナショナリズム」、所与の領域において全体を拘束しうる決定が民主的である体制を指す「民主政」などの概念が提示される。また、「自律性」が、自立的市民による参加を意味する公的自律性と、私的生活の政治権力からの保護を意味する「私的自律性」から構成されることが示される。その他、現代社会の特徴を捉えるための概念として、社会経済諸関係の越境規模の相互依存の深化過程を意味する「グローバル化」、市場原理主義による政治と社会の両空間の再編を指す「新自由主義」、新自由主義的グローバル化への対応として生じる「ネオポピュリズム」なども紹介される。

第一章の「『国家』への視座」では、国家の理念・理論を振り返り、政治

と社会経済が相互組成的関係にあり、共進化してきたことを前提として、国家概念の二重性の連関が図られる。例えば、国家の政治形態の関係性を捉える上では、国家の基軸的編成の類別化を意味する「国家構成」（例、複合国家や単一国家など）、主権の帰属位置や国家元首の違いを意味する「国家形態」（例、君主制や共和制）、立法府と行政府から構成され、それらの関係に基づく編成形態である「政府形態」（例、議院内閣制や大統領制）といった要素が重要になることが指摘される。そして、現代国家が、商品生産型社会的（再）生産関係が領域規模で政治的に編成された社会経済関係の総体であり、「資本主義国家」（例、自由主義国家や介入主義国家、通常国家や例外国家などの形態を採る）と捉えられることが指摘される。言い換えれば、国家が統治を行うこと（「国家の統治体制」）は、政府が所与の社会経済諸関係を政治的に組織し、権力核が国家権力を行使することによって秩序を維持することを含意するのである。

第二章の「国家権力への視座」では、権力の概念に関する論争を振り返り、構造と主体の関係性（行動主体は、社会的関係において実在し、社会的文脈をふまえて自己認識し、再帰的に行動することで、構造を再生産・変容させる）をふまえて、国家権力の政治機能が検討される。ここでは、国家存在を組成している諸関係の複合的構成である「国家構造」が、経済社会諸関係および社会諸勢力の配置を反映したものであり、また国際状況と不可分であることが指摘される。また、「国家権力の政治機能」として、政治と経済が相対的に自律していることを前提に、国家権力を媒介に複合的に組成することで、国家存在が構成されることが確認される。言い換えれば、国家装置は、国家企図をもって社会経済諸関係を凝集し、再生産・再編させるのである。

第三章「国民国家とナショナリズム」では、関係論的視座から国民国家に関する再考察がなされ、ナショナリズムの二面性が明らかにされる。ここでは、「国民国家」という概念が、国家という関係論的表象の人格的実在が国民であり、両者が一体的に表象されたものであることが確認される。した

がって、国民国家の概念は、民族や言語の共通性を前提としつつも、社会的関係が領域化し、一定の統一性を帯びるためには法制的契機が不可欠であることを示唆するのである。言い換えれば、政治権力がエスニック集団の集住性と文化の共通性を領域化することで国民が形成される。これらをふまえて、著者は、「国民国家」が「包摂と排除」や「統合と分離」の二面性を内包していることを指摘する。そして、本章では、国民統合の情緒的紐帯である「ナショナリズム」についての検討も行われる。例えば、ナショナリズムの多様性として、「シビックナショナリズム」と「保守的ナショナリズム」が言及される。また、国民統合の審級として基底価値の内面化を求め、また政治的社会的実践を審問することを必要としているため、ナショナリズムが他のネイションの存在を前提としていることが示唆される（「ナショナリズムの国民性と国際性」）。

第四章の「新自由主義国家とネオポピュリズム」では、資本主義国家が新自由主義的転回を経験したこと（新自由主義的資本主義国家）が明らかにされたうえで、ネオポピュリズムが台頭することになった背景が考察される。まず、「新自由主義」が、社会自由主義にもとづき構築された社会経済諸関係を市場原理主義により再編し（新自由主義的資本主義国家の形成）、それに基づいたグローバルシステムを構築する試みであることが指摘される。そして、「新自由主義とネオポピュリズムの親近性」が確認される。すなわち、新自由主義が領域規模の社会経済諸関係の脱領域化をもたらすなかで、社会経済関係と統治機構の組織的再編が進められており、そのひとつの形態としてポピュリズム（民衆主義＝抽象的概念である民衆に言及することで再統合をめざす）が生まれるのである。

第五章の「国民国家の政治的輪郭」では、政治的基層文化に注目して、日米の国民国家の差異が検討される。ここでは、日米の両国が資本主義国家という共通性をもちながらも、国民国家の形成史の差異を背景に、異なる形態（例、米国：共和政、大統領制、複合国家共和政大統領型連邦国家、リベラ

リズム、日本：立憲君主政、議院内閣制、単一国家、エスニックな共同体観）を採るに至ったことが明らかにされる。

終章の「グローバル化と現代国家」では、グローバル化のなかで現代国家が変容していることをふまえて、民主政の深化のために関係論的視座が有効であることが確認される。まず、グローバル化のなかでの「国民国家の変容」として、領域型主権の相対化と強化、立憲主義の国際的波及の深化と限界、民主政の再興・ポピュリズムの進展、新自由主義的資本主義国家の限界などが生じていることが指摘される。そして、「グローバル民主政の可能性と課題」が検討され、社会民主主義に基づくグローバルガヴァナンスであるコスモポリタン民主政を実現するために、国民国家を基盤としつつ、人権や社会的公正に配慮した秩序構築を社会の諸次元で進めていくことが必要であるとする。

以下では、本書の意義と残された課題を検討する。まず、本書の意義は、「国家」に関する政治学（および社会諸科学）の膨大な諸業績を批判的に検討し、関係論的国家論を展開するために必要な諸概念とその関係性を明らかにした点にある。本書において先行研究として言及されているものは、「国家」に関連した政治思想・哲学から政治理論、そして現代政治分析まで政治学の諸領域に広がっている。本書は、これらの先行研究の到達点や知見を、著者独自の理論的視座である関係論的アプローチから再構成したものである。言い換えれば、本書は、政治学の諸領域で数多くの優れた業績を発信してきた著者だからこそできる重厚な研究といえよう。本書で展開された関係論的国家論は、政治学の各領域で研究を進めている研究者にとって、自らの研究を深化させたり（例、本書で展開された諸概念をふまえることで、新たな問題の発見や関連する論点への接続が可能となるなど）、他者の研究との接続を構築する（例、本書で展開された概念を媒介とすることで、異なる領域の研究との関係性が明確になるなど）うえで、大きな示唆を与えるものといえよう。

政治学の各研究者にとって、自らの研究を発展させ、また他者の研究との接続を築いていくための示唆を提供することに加え、本書では、現代政治学への重要な問題提起もなされていると思われる。現在の日本（そして、世界各国）の政治学の学界状況は、専門分化が進み、個別の論点に関する知識の蓄積が大幅に進む一方で、異なる理論・手法を用いる研究者の間で建設的なディスカッションを展開するのが困難であったり、政治現象の中核に位置する国家の全体像を捉え切れていないという問題点がある（cf. 加藤 2017）。国家の全体像を捉えるためには、個別の論点における知見を整理し、統合的にまとめ上げるための抽象的な一般的概念が不可欠である。本書は、細かい論点に関する知見を蓄積することに力点を置く経験主義的・実証主義的な政治学の限界を示す一方で、多くの研究者の参照点となりうる「国家」に関する一般的概念を提示した点で政治学への重要な貢献となっている。

しかし、その一方で本書には、今後深めていくべき論点も残されているように思われる。まず第一に、本書の政治学への理論的貢献をより明示的なものにする必要がある。冒頭で述べたように、政治学において、「国家」に関する概念的・理論的考察を行ったものはそれほど多くはないが、存在している。例えば、著者が翻訳を手がけてきたボブ・ジェソップによる国家論（Jessop 1982, 1990, 2002, 2008, 2016）との理論的差異はどこにあり、何を付け加えたのだろうか。本書において「関係論的アプローチ」を採用し、類似の概念（国家存在、国家企図など）を用いていることに示されているように、著者がジェソップから多くの影響を受けているのは明らかであるが、ジェソップの国家論との差異については明確にされていない。「戦略関係論アプローチ」に依拠し、「国家」の概念的・理論的考察を行い、新しい国家論を提示したジェソップの近著（Jessop 2016）は、社会科学の現代的古典の位置を占める好著といえる。本書がジェソップの国家論に付け加えたことを明らかにし、発信していくことは、世界の政治学（および社会科学）への重要な理論的貢献になると思われる。言い換えれば、本書には、国家論に関する先

行する類似の試みとの差異を明示することによって、理論的意義を明確にすることが求められている。

第二に、本書の知見を経験的分析に活用するために、概念のさらなる展開が必要となる。本書で提示された諸概念は抽象度の高いものであり、国家一般の特徴を把握するためには有益といえよう。しかし、政治学は、国家一般の特徴を検討することだけでなく、ある時点における特定の国家の特徴を分析的に把握することも課題といえる。この課題に取り組むためには、一般的な特徴をふまえた上での差異性を把握することが不可欠であり、多様性を捉えるための諸概念の展開が必要である。本書でも、ナショナリズムの類型や、国家構成、国家形態、政府形態などに関する分類が紹介されているが、現代国家の多様性を把握するためには十分とは言えない。現代国家の特徴を把握するために、経験主義・実証主義的な政治学の知見もふまえた概念のさらなる展開が求められている。

第三に、国家論の理論的な構成要素は何か、という点に関する考察も必要である。政治学は、政治現象の「特徴把握」と「因果分析」を行い、多様な知見を蓄積してきた³⁾。本書で展開された諸概念は、主として「国家とは何か、どのように定義できるか。国家はどのような要素から構成され、そしてどのように把握できるか」という論点に関するものであり、上記の「特徴把握」と関係している。その一方で、「国家は、なぜどのように生じたのか」という論点（因果分析）に関する概念は十分に展開されていない。他の政治学の領域と同様に、国家論も「特徴把握」と「因果分析」という課題から構成されるとすれば、後者に関する考察も深めていく必要がある。この指摘は、上記の経験分析のための概念の展開の必要性という点と関連して、国家論の構成要素とは何かという問いをもたらす。少なくとも、国家論には、分析課題として、a「特徴把握」とb「因果分析」があり、分析レベルとして、i「抽象的一般的概念」、ii「経験分析のための具体的概念」、iii「経験分析」があると考えられる。本書では、「特徴把握のための抽象的一般的概念（a i）」

が展開されているのみであり、その他の点に関しては議論が展開されていない。経験分析は理論研究とは別の仕事であるとしても、国家論の理論的課題として、「特徴把握のための具体的概念の展開 (a ii)」や「因果分析のための概念の構築 (b i および b ii)」が残されている。これらの点に関して、関係論的アプローチの視座からの考察が求められている。

最後に、現代社会において「国家」について検討することの政治学（および社会科学）的意義についてである。たしかに、近代および現代社会における政治現象や社会秩序を考察する上では、「国家」という要素を無視することができないのは自明であったといえる。そして、この広範な合意・想定に依拠することで、現代政治学は「国家」に関連した諸現象の分析を行い、知見を蓄積してきた。しかし、社会理論が指摘するように（例えば、ギデンズ 1993, ベック 2005, 2008）、流動化・複雑化が進む現代社会において、もはや「国家」という単位は自明ではなくなっている。むしろ、新しい政治現象や社会秩序を捉える上では、「ガバナンス」が有益と主張される場合もある（例、ガバナンスについては、Bell and Hindmoor 2009, Bevir 2012, Pierre and Peters 2000, Rhodes 1997）。したがって、国家論の研究者は、今でもなお「国家」を政治学（および社会科学）の中心に据える必要性を積極的に述べる必要がある。本書でも、「国家」を論ずることの意義は触れられているが、現代社会の変容と学界状況をふまえると、より積極的に展開する必要がある。評者も、著者と同様に、政治学における国家論の必要性や重要性を強く感じ、国家論の理論的発展に貢献したいと考えているだけに、上記の四つの課題には今後取り組んでいきたい。

本書は、政治学（および社会科学）の重要な概念でありながら、これまで十分に展開されてこなかった「国家」に関する概念的・理論的考察を行ったものであり、提示された関係論的国家論は、政治学者にとって、自らの研究を深化させたり、他者の研究との関連性を発見・構築していくうえで有益な視点をもたらすものである。本書には考察を深めていくべき論点が残されて

いるが、これらは評者も含めた次世代の研究者が取り組むべき課題でもある。これまで蓄積されてきた「国家」に関する数多くの知見を、関係論的アプローチから再構成した本書は、現代政治学における国家論の到達点と課題を示すものであり、重要な意義をもつものである。後続の研究者が、本書を出発点として、上記の論点を深めることで、国家論を深化させていくことを期待したい。評者も、著者の長年の研究活動およびその成果にあらためて敬意を表すると同時に、今後継承発展していきたいと考えている。

注

- 1) 本稿を執筆するにあたって、立命館大学人文科学研究所「グローバル化の中の東アジア」研究会で書評会を行った（2017年9月）。研究会にご参加いただいた諸先生方とのディスカッションを通じて、本書に関する理解が深まった。特に、本書の著者である中谷義和先生には、評者の不躱な質問に対しても、丁寧かつ真摯にご対応いただいた。中谷先生および研究会参加の先生方に心からお礼申し上げたい。
- 2) 中谷義和の単著は、本書『国家論序説』に加え、以下のものがある。『アメリカ南部危機の政治論：J.C. カルフーンの政治理論』（御茶の水書房、1979年）、『草創期のアメリカ政治学』（ミネルヴァ書房、2002年）、『アメリカ政治学史序説』（ミネルヴァ書房、2005年）、『グローバル化とアメリカのヘゲモニー』（法律文化社、2008年）、『政治学入門：歴史と概念』（法律文化社、1998年初版、2010年第2版）。その他にも、共著書が多数あることに加え、ボブ・ジェソップ、デヴィッド・ヘルド、フランク・カニンガムらの翻訳を多数手がけている。
- 3) 例えば、評者の専門である比較福祉国家論の例を挙げれば、「特徴把握」に関する論点は、「福祉国家とは何か」、「それはどのような特徴（共通性と差異）を持っているのか」などであり、「因果分析」に関する論点は、「福祉国家はなぜ、どのように生じたのか」などである（cf. 加藤2012）。

参考文献

- 加藤雅俊 2012 『福祉国家再編の政治学的分析』 御茶の水書房。
——— 2017 「新しい政治学（の教科書）には何が必要か」『法政論集』269号。
ギデンズ、アンソニー（松尾精文ほか訳）1993 『近代とはいかなる時代か』而立書房。
佐藤成基 2014 『国家の社会学』 青弓社。
ベック、ウルリッヒ（木前俊秋ほか訳）2005 『グローバル化の社会学』 国文社。
———（島村賢一訳）2008 『ナショナリズムの超克』 NTT出版。

- Bell, Stephen and Andrew Hindmoor 2009 : *Rethinking Governance*, Cambridge University Press.
- Bevir, Mark 2012 : *Governance*, Oxford University Press.
- Campbell, John L. and John A. Hall 2015 : *The Worlds of States*, Bloomsbury Academic.
- Dryzek, John and Patrick Dunleavy 2009 : *Theories of the Democratic State*, Routledge.
- Lachmann, Richard 2010 : *States and Power*, Polity Press.
- Jessop, Bob 1982 : *The Capitalist State*, Martin Robertson. (田口富久治ほか訳『資本主義国家』御茶の水書房、1983年)
- 1990 : *State Theory*, Polity Press. (中谷義和訳『国家理論』御茶の水書房、1994年)
- 2002 : *The Future of Capitalist State*, Polity Press. (中谷義和監訳『資本主義国家の未来』、2005年)
- 2008 : *State Power*, Polity Press. (中谷義和訳『国家権力』御茶の水書房、2009年)
- 2016 : *The State*, Polity Press. (中谷義和ほか訳『国家』御茶の水書房、2018年)
- Pierre, Jon and Guy B. Peters 2000 : *Governance, Politics and the State*, Palgrave.
- Pierson, Christopher 2011 : *The Modern State (3rd edn)*, Routledge.
- Rhodes, R. A. W 1997 : *Understanding Governance*, Open University Press.
- Smith, J. Mark 2000 : *Rethinking State Theory*, Routledge.
- Smith, J. Martin 2009 : *Power and the State*, Routledge.